

本田弘慈著 (1912年 3月 31日—2002年 4月 6日)

“家族の救い”

「ハハキトクスグカエレチチ」

わたし じゅうなな さい はる かんさい しんがっこう
私が十七歳の春(1929年)、関西の神学校に
にゅうがく じゅけん き とき ちち
入学しようとして受験に来ていた時、父からこのよ
でんぼう き わたし ちち ないしょ いえ と だ
うな電報が来ました。私は父に内緒で家を飛び出し、
おおさか にがわ しんがっこう き わたし いえ
大阪の仁川にある神学校に来ていたのです。私が家
かえ ちち しんせき ひと あつ わたし
に帰りますと、父は親戚の人たちを集めて、私をなぐ
ったり、けったりしました。

きょう ぼくし
「なぜキリスト教になったのか。しかも、牧師な
しんがっこう い いえ せんぞ
どになろうとして神学校に行くとは。この家は先祖
でんらいぶつきょう いえ きょう
伝来仏教の家であるのに、おまえがキリスト教にな
せんぞ もう いえ
ったら、ご先祖さまに申しわけがない。また、この家の
しょうばい りょうりや ぼくし さけ
商売は料理屋なのに、おまえが牧師になって『酒を
の い きやく もう
飲むな』などと言ったら、お客さんに申しわけがないぞ。この親不孝者が。」

い わたし わたし いえ
こう言って、私をなぐり、けるのでした。私の家
ほくりく ふくいけん まるおか ところ
は、北陸、福井県の丸岡という所がありました。そこ
ぶつきょう さか ところ わたし いえ りょうりや
は仏教の盛んな所でした。そこで私の家は料理屋
ちち しか むり
をしていました。父が叱るのも無理はないとわかって
わたし こた ちち はは
いましたが、私は答えませんでした。ついに父も母も

て あ たの い
手を合わせて、頼むように言いました。

ねが きょう ぼくし
「お願いだから、キリスト教の牧師になるのはやめてくれ。」

へんじ な だ
私は返事のしようもなく、泣き出してしまいました。これは少年の日のことですが、それからもなお

わたし しん つづ
私はキリストを信じ続けてきました。そして、いつか
りょうしん かみ かえ すく ぬし
両親がまことの神に帰り、イエス・キリストを救い主
しん く いの つづ とし
と信じる日が来るように、と祈り続けてきました。時

ちち あ とし しんこう すす ちち
おり父に会う時、信仰を勧めましたが、父は、「わしは
しょうばい い
商売をされていて、うそも言わねばならないので、キリ
きょう こた
スト教にはなれない」と答えていました。

わたし にゅうしん さんじゅうごねんめ ちち
しかし、私が入信して三十五年目に、ついに父は
く あらた すく ぬし しん
悔い改めて、イエス・キリストを救い主と信じたので
つづ はは にゅうしん ちち にゅうしん とし わたし
す。続いて母も入信しました。父は入信した時、私
まえ て い
の前に手をついて言いました。

こうじ かみ めぐ し
「弘慈、わしは神の恵みを知らなかったとはいえ、
しんこう はんたい
おまえの信仰に反対し、なぐったり、けったりして、ま
もう
ことに申しわけないことをした。ゆるしてくれ。」

わたし とし かみ やくそく しんじつ
私はその時、神の約束のみことばが真実であるこ
な
とがうれしくて泣きました。

その後、父は平安のうちに天に召されました。その二年後、母もなくなりましたが、母はその時、「光り輝く天国が見える」と言いました。私が「お母さん、天国にはイエスさまも、おじいさんもいますよ。」と言いますと、母は「うれしいなあ」と言い、その後、静かに息を引き取ったのです。

クリスチャンにとって、自分の両親や家族が救われることほどうれしいことはありません。聖書には、「主イエス・キリストを信じなさい。そうすれば、あなたも、あなたの家族も救われます。」と書かれています。(使徒の働き 16:31)。これは、私どもがイエス・キリストを信じる時、神が私どもの家族をも救いに導いて下さるという約束のことばなのです。

ある人は、家族が反対するからと言って、信仰に入ることをためらったり、引き延ばしたりすることがよくあります。しかし、それは不信仰なのです。あなたがキリストを信じる時、あなたの家族も救われます。私どもはそれを信じて、大胆に信仰生活を始めるべきです。